

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

令和 6 年 4 月 25 日 坂下まちづくり協議会、坂下区長会

開会

区長会長あいさつ

本日は貴重なお時間を割いていただき、誠にありがとうございます。区長会及びまちづくり協議会を代表して、感謝とお礼を申し上げます。

本日はよろしくお願いします。

市長

公約とした対話集会は、市民の皆さんの声を聞く場を作り、一方通行の要望ではなく、対話するということで始めたもの。ぜひ一言ずつ、皆さんの考えを聞かせてもらいたい。

4 月から始めて、1 回目は加子母地区の林業に携わる方、2 回目は福岡の農業に携わる方。今日 3 回目がこの坂下地区。5 月もすでに申し込みがある。地域、分野、業界関係なく、また年齢も関係なく、児童生徒や保護者の皆さんともやっていきたい。どうしたら中津川市が良くなっていくのか、いろんなご意見をいただき、対話をしたいと考えている。限られた時間ですが、よろしくお願いします。

参加者

坂下地区では、中津川市の総合計画につながる、まちづくりビジョンを策定して、区長会、そしてまちづくり協議会さらには、地元の観光協会や商工会議所、関係諸団体と連携しながら事業推進をしてきた。過疎地域に指定をされたが、全国には過疎地域でも成功しているところもあるので、この地区の活性化の進め方を相談しながら、坂下、山口、川上の 3 地区で連携を取りいろんな活動を進めている。

坂下地区のまちづくりビジョンには 4 つの柱があり、1 つは、安全で便利な暮らしができるまちづくり、2 つ目は健康で生き生き暮らせるまち、そして 3 つ目は、地域資源を生かした魅力あるまちづくり、そして 4 つ目が、まちづくりを推進していくために必要な、確かな仕組み作り。平成 22 年度からこのビジョンを策定してスタートし、一貫して中津川市総合計画との整合性、地域住民の参画を得ることを基本に取り組みをしてきた。

住民参加を促していく 1 つの取り組みとして、3 年ほど前に 30 ほどの各自治会の代表者、この地区役員の中にいる地域づくり委員とそれから若い男女を中心にしながら、140 名アンケートを実施した。アンケートの一番の目的は、自分たちにできる地域づくりに意見、要望、そして提案をいただくというもの。およそ 350 件あった意見の中で特に多かったものが、1 つは坂下地域の伝統文化、観光資源などいろんな地域資源をもっと生かしたまちづくりを強力に進めて欲しいというもの。そしてもう 1 つは、健康で生き生き暮らせるまちづくりで、地域医療に対する期待、熱望されているということ。この 2 つでおよそ 50% 近くを占めた。

そこで、今日はこの 2 つに関連をする内容で、この坂下地区の取り組みについて報告しながら、小栗市長の考えも聞きたい。

参加者

やさか地区は3年ほど前に、過疎地区に指定をされた。私の若いときには7,000人近くいた人口も、今はもう4,000人を切る勢い。坂下地区で亡くなった方が72人、生まれた子ども11人。もうあとわずかで4,000人を切る気がしてならない。飲食店も少なくなり、若者が集う場所もなく、寂しいまちになってしまった。こんなことではいけないと、昨年4月に、有志で、六斎市に似たお祭りを「きりら月の市」という名称で立ち上げたが、山口、坂下、川上が一緒になってやるため、途中から「やさか月の市」という名称に変えた。

テーマは、人々が集い、笑顔あふれるまち「やさか」。子どもたちが楽しくなってくる、笑顔あふれるまちづくり。観光のお客さんに魅力のあるまちづくり。神坂スマートインターの開通を見据えて、この道の駅を改修して、売店で中津川駅前の特産館においてあるような特産品を売り、関東から来たお客さんが神坂、馬籠を経由して下呂、高山へ行くときに、この道の駅きりらの売店で特産品を買って帰る、なるべく滞在時間を多くしてお金を落としていただくことを考えている。裏手のリバーサイド公園が使い勝手が悪いので整備して、お祭りやイベントを開催し、人々が集い楽しめる場所にしていきたい。

区長会まち協、商工会、大学も加わり、やさか月の市実行委員会を4月に立ち上げた。きりらの「やさか月の市」がシンボルイベントとなり、地区内外から多くの人々が集い、人口密度を一層高めていきたい。住み続ける地域の未来のために大切なことを実現できるように全力を尽くしていこうと、まち協、区長会で取り組んでいる。

令和5年度は8月に与三郎まつりin月の市、10月にふるさと花火大会の日に月の市を開催した。毎月とはいかないが、椈の湖そば祭り、音楽フェスin月の市といったようにお祭りと一緒にするなどで開催している。今年の市政懇談会できりらの現状を見ていただいて、前向きな答えをいただいたので、補正予算で通していただきたい。

わざわざ中津の本町公園まで子どもを連れて行って遊んでいるような現状なので、坂下に住みたいという若者が増えるように、イベントをやり、公園を作り、古いものを残しながらまた新しい取り組みをやっていきたい。やはり人々が笑顔で、健康が一番なので、地域医療の方にもご留意いただきたい。

市長

椈の湖音楽フェスティバルは、椈の湖フォークジャンボリー発祥というのもあって、各地のイベントがある中で、音楽をテーマにして脈々とやり続けていることは、参加する方や来場者の方にも非常にわかりやすい。うまくいっている、成功されているのはそこだと思っている。

自分の体験から、とにかくイベントは企画している本人たちは成功のイメージしかないが、実際はそうならないことがたまにある。成功しないのはなぜか検証すると、コンセプトがはっきりしないとか、ターゲットがはっきりしていない。椈の湖の音楽フェスは、コンセプトをしっかりとっている。ターゲットも、家族連れで公園で遊んでもらえる、いろんな団体の方がステージに出たので、出演者、園児たちを見に行く形で呼び込むことができる。やさか地域

で真剣に考えていただき、ありがたいと思っているし、坂下の皆さんもすごく地域愛が熱い。何とか地域を良くしていきたいと地域がまとまっている。その地域の結束力をどう生かしていくか。過疎化は坂下地域だけじゃなく中津川市全体、また日本全国全体のことで、得策はない。その中でも、しっかりと取り組みをしなきゃいけない。

地域の活性化についても、道の駅きりらの有効活用に関しては、もともとの施設があり、道の駅という位置付け上、駐車場もあるし、来やすい場所で、本当にいいところだと思うが、観光客として訪れるときに、どういうところだったらいいかと考える。

木曽、南木曽町からもスマートインターに期待されているが、インターができるから人が来るわけではない。人を呼び込むためのコンセプトをどうするか、どういう人を呼び込みたいのかが明確になると何をしなきゃいけないかが明確になる。例えば、売店で何をやらなければいけないのか。食べ物屋さんで、何を食べてもらいたいのかとか、それによって全然違う。年齢層、日本人か外国人かなどをはっきりしないと、なかなか具体的にない。そういったところが大事かと思うので、地域の皆さんと市の観光部署と一緒に考えていく。これに限らず、何回も議論しながら、若者を呼びたいのなら10代、20代、30代の人中心になって考えてもらうといろんなアイデアだとか、いろんなチームが出てくると思う。

今、馬籠地区は本当に外国の方が多い。コロナが昨年5類になったがコロナ前の外国人の数よりも増えるだろう。やはり中国の方が増えている。その馬籠から、ここに人を呼び込むために、どうしたらいいか。例えば馬籠からやさか地区を通って下呂、高山に行く際にここに立ち寄ってもらうためには、何があればいいのか。夕森公園、付知峡は外国人が大好きな滝があり観光資源としてすごくいいので、そこに呼び込む仕組みを作っていく。なかなかすぐにはできないが、観光地を回るようなシャトルバスもできるといいと思っている。地域の皆さんといろんな話をして進めていきたい。

六斎市も中山道のウォークラリーと絡めてとか、JRの企画と合わせるとかで開催しているので、やさか月の市も2カ月に1回ぐらいとか、花火大会なども集約して、いろんな企画と合わせてやってもいい。坂下高校の咲かしたマルシェも全国で表彰されたが、坂下高校に1,500人近く集まっている。一緒になってやるとかアイデアはいろいろあると思う。周遊してもらうようなものがアイデアを出し合えばもっとたくさんあると思う。

参加者

坂下高校からすでに11月3日に開催すると連絡があった。去年は駐車場が狭いので、道の駅に車を停めてシャトルを出した。キッチンカーも来たが狭すぎるので、今年はぜひ、このきりらの駐車場でキッチンカーをやってもらって、ピストンで結びながらと考えている。たまたまその日から1週間、夕森公園もみじ祭りだったので、今年は夕森へ行ってやるとかというような構想を坂下高校の先生と、打ち合わせする予定になっている。

このきりらは、そばを使ったものを出すという条件があり、椈の湖のそばを使うことをメインにやっている。土日には行列ができるぐらいお客様がみえてるが、付知の栗きんとんモンブランもすごいお客が来る。若い子にバズる、ヒットすると全国的に広まっていくので、例えばアイスクリームとかパフェとか何かを、この下の売店を改修してやりたい。やはりこ

の建物ではできない。改善しながら、集客を考えている。観光局の方も、苗木城から、あちこちに行くようにして、去年も苗木城からもみじまつりに来た人も結構いた。坂下福德神社という、宝くじに当たると有名な神社があるので、できれば、このきりらの駐車場に宝くじ売り場を建設して、観光バスで馬籠から来て、きりらで宝くじを買って、蕎麦を食べて、帰るとかいったこともいい。観光局は中津川の菓子祭りに集中してお金を入れているので、郡部にもまわしてもらって、ぜひ盛り上げていきたい。

市長

どこに行って、何を見て、食べてから体験をして、という物語が大切だと思う。どこに行くときも、何見てあそこで何かしてと計画を作る。何か特色があると、すごくいいのではないかな。

参加者

どこか旅行に行っても、パッとドライブインに入った瞬間に、この町は元気か、寂しい町かすぐわかると思う。以前は、道の駅きりらはどっちかっていうと寂しい、来ても売店が閉まっている、レストランをやっていない状態だった。

地元の人が元気でなかったら、やっぱり観光客も寄ってくれないので、そんなまちにしていきたいと「月の市」を立ち上げて、3回やったが、入れないぐらいの人が来て、めちゃくちゃ盛り上がった。これは本当にずっと続けていきたいと思っている。六斎市も参考にしたが、六斎市もこちらに来て開催してもらいたい。商工会議所の人も、あちこち行ってやりたいような話もしていたので、合併しても何年も経つので1つになってやっていきたい。

市長

坂下高校は今年も11月にやると伺ったので、夕森もみじまつりも同じ時期で、今年の4月から夕森の指定管理業者になった業者ともしっかり連携を取りながらやっていくと面白くなる。いろんな連携が取れていくといい。

令和8年で苗木城が築城500年になるのを、苗木地域の皆さんだけでなく、中津川市全体で盛り上げていくようことをやりたい。いろんなお祭りが各地であるのをタイアップもしながら、相乗効果でそれぞれが良くなっていくようなまちづくりができるといいと思う。

進行

2つ目のテーマで、健康で生き生きというところ、まちづくり協議会の副会長からお願いします。

まちづくり協議会 副会長

坂下が合併した時にはまちづくり協議会はなかった。平成18年の7月に設立総会があり、以来18年経ち、歴史は浅いが、市の中では古いと思っている。

今までの会は、例えば阿木地区、坂本地区、坂下地区といった地区割りにされていた。今

回は、私たちが希望すれば小さな集団でも話を聞いてもらえるということで、市長のまちづくりにかける思いがしっかり伝わってくると感じた。

新市になって、中津川市新市建設計画の基本構想の中で、山口、坂下、川上地区はやさか地区というくくりで「思いやりゾーン」として位置付けられていた。やさか地区にある坂下病院、県立坂下高校、ＪＲ坂下駅といった施設は、旧坂下町がまちづくりのコンセプトの中で、意図的に作ったり、招聘してきたりしたもの。坂下病院は安心して暮らせるまちの象徴、続く保育教育施設は子どもが守られ、育まれるまちの象徴、坂下駅は、人を温かく迎え入れる、坂下の象徴的な玄関口だと当時の町長が言っていた。

まちづくり協議会が目指したことは、思いやりゾーンの玄関口としての、ＪＲ坂下駅を中心としたコンパクトシティ的なまちづくりだったのではないかなと思う。まちに必要なインフラストラクチャーが、坂下地区の比較的限られた範囲に集中して存在している。山口、川上地区では小売店がどんどん減少していったのを補うような形で、坂下にはスーパー、中小の小売店などがあった。金融機関とか郵便局も駅近くにあった。

坂下診療所について、４つの視点から述べさせていただく。１つ目は、この坂下地区、やさか地区は、旧市内に比べて圧倒的にかかりつけ医の数は少なく、南木曽からも坂下診療所がかかりつけ医になっている。坂下病院から坂下診療所になっても、診療所を大切にする事業として、老人クラブが総出で坂下病院の樹木の剪定、草刈をやっていた。令和２年度からは区長会がこの運動を続けている。坂下診療所の今後は、坂下病院建設に協力してきた旧恵北の町村、木曽南部の町村の住民にとっても、大きな関心事。

２つ目は、民間移譲を進めて、病院機能を回復できないかという声が多く寄せられている。中津川市は新病院改革プランをまとめ、民営化に動き出したが、難しい問題が山積している。プロポーザルに応じた１社に今年の７月には民間移譲と聞いていたが、一部医師会の反対があり、一気に進まなくなったと聞いている。市民の多くは、市民病院と坂下診療所という形と市民病院と純正会病院の形のどちらが得なのかと単純に考える。医療の充実という観点で、坂下診療所が民営化をして純正会病院になると今よりも診療科が増えて、得策と思う。南木曽や大桑方面の患者も増えることは間違いない。また市の財政面からも、診療所の維持より、民間に移譲した方が負担軽減だと思う。

もう１つは、市民病院についても心配が寄せられている。医師不足で診療待ち時間が長い。医療報酬が少ない、医師が名古屋に帰ってしまう、診療科はあるのに常勤医師が雇用できない、入院してもすぐに退院させられるといった、待合のうわさ話も聞く。かつての坂下病院と同じように、診療科が減り、経営が一層困難になるのではないかと心配している。医師不足だけでなく、建物も老朽化している。リニアに向けたまちづくりを進める予算も必要の中で、市民病院を新築する財源が確保できるか、また医師不足の中で、市民病院に来てくれる医師確保をできるのかと心配している。このような不安を払しょくするには、坂下診療所を民間移譲して新たな病院を迎え、市民病院と２つの病院で医療の充実を図るのがベターではないかなと思う。

最後になるが、中津川市は、東濃で唯一、南海トラフ地震の防災対策推進地域に指定をされている。坂下には阿寺断層もあり、断層が多いところ。断層に起因する地震が起きると、

県内には根尾谷断層などもあり、大規模災害となるのではないかと想像する。免震構造の坂下病院を地震対策に使わない手はないと思うので、考えていただきたい。民間病院になっていけば、医師も多くなり、震災時に有効。ぜひ、地震災害の防災拠点医療拠点としても考えていただきたい。

中津川市街地からは、坂下は東の端かもしれないが、木曽地方からは賤母を過ぎたら広く見えて街だなと思うと聞く。坂下は中津川市の東の玄関口で、いろんな人を迎えたいと思っている。

市長

病院の問題に関しては、非常に大切な重要なことだと思っている。年齢に限らず、病になれば、赤ちゃんから皆、病院にかかるが、病院には、まちのクリニック、総合病院、診療所、市民病院、それぞれの役割がある。坂下病院を残さないとは言っていない。坂下診療所の利活用を含めて、中津川市として、市民の皆さんの医療を確立していくには、最終的には市民病院に行きつく。

市民病院も、建物というハード面もそうだが、ドクター、看護師の皆さん、機器を含めてソフト面でも、まだまだ充実しなきゃいけない。市民病院をどうしていくかも含めて考えていかないと、一歩間違えると中津川市の医療崩壊が起きることを懸念している。坂下診療所だけを優先し、市民病院は二の次というような考えではなく、包括的に中津川市の医療の計画、グランドデザインを描く中でゴールを作り、市民病院、診療所、町のクリニック、位置付けをどうするかも含めて包括的に考えていかないと、行き当たりばったりでは市民病院が立ちいなくなることを危惧している。

坂下診療所はとても重要だが、合わせて市民病院をどうするかを考えて、市民の皆さんの医療を確保する。スピード感を持って取り組むと話しているが、この医療の問題に関しては、逆行するが、早く決めれば良いということでもないと思っている。市民病院も含めて、じっくり、しっかり捉えていくべき。市民病院も医師の確保が大変で、かつての坂下病院のようになりかけているところも少なからずある。いろんなことを模索しなければいけない現状。

今、市民病院は市立で、なかなか厳しく、公設が今後成り立つか。民間譲渡も1つの方法だと思う。多治見市民病院のように指定管理というやり方もある。いろんなやり方、パターンを考えた上で、中津川市としてどれがいいか議論しなければならない。今後、過疎化、人口減少を考えると、恵那市も市立の市民病院はたぶん成り立たなくなってくる。中津川市と恵那市と一緒にやったらどうかとか、長野県木曽町、南木曽町と一緒にとか、何が一番いいのかを考えなければいけない。今すぐではないが、近い将来、やっていかなければいけない。市民の皆さんの医療をしっかり守るために何が一番得策かを考え、どのパターンを選択すれば、将来、医師、看護師の確保を計画的に担保できるかも含めて体制を作る。市民病院の老朽化もあり、場所も検討が必要。また、高齢化もあるので、介護もつきもので、医療の先にある介護を担保することが市内全域で共通する。介護施設、介護体制もないと、医療だけ充実してももたない。特に介護に関しては、病院ではなく自分でみてくださいますとなるパターンが多い。病院から介護のステップに進むための、介護施設の受け入れを考えないと難しい。

坂下診療所について、非常に重く受け止めているが、中津川市全体を考えると、市民病院につながると考えている。

参加者

坂下の人口構成は66歳以上が1,620人、全体の40%を占めている。70代以上は688人で17%。70代は元気でないと町がもたない。健康寿命をいかに維持できるか、延ばすことができるか。そのために、病院も大事、早めに検査を受けて、健康を維持していく。「きりら」が、若い人も集まって活性化して、脳と心の健康をつくる。楽しみの元気な場も大事。若い人も子育てしないといけない。少子高齢化は大変だと思うが、地域活動には定年がない。私も健康寿命に努めて元気でいたい。ぜひ病院、医療を身近に受けて、気軽に検査できる体制を取ってほしい。道の駅「きりら」に素晴らしい公園もあるので若い人の知恵で企画できて、高齢者と一緒になってできると思っている。多くの課題があるので、この会だけで終わらずに、今後も引き続いてお願いしたい。

進行

市長が、リニアの効果を駅周辺だけではなく、市内各地のまちづくりを線で結ぶ戦略を描いていきたいと話していた。加えて、安らぎと最先端のハイブリッドっていう表現もあった。この記事に共感をした。

坂下地区としても応援し、地元としては、引き続き、やっぱり住民参加を大切にしながら、まちづくりに努めていきたい。課題はたくさんあり、人もお金も足りないが、できることはやっていこうと思っているので、引き続き、地元の資源を今後も継続発展できるよう支援をお願いしたい。

市長

皆さんのお話を伺って、課題も多いが、皆さんの地域に対する思いが非常に強いと思う。中津川市は本当に広域、広いエリアで、それぞれの地域の特色があって、それぞれの地域の特色を生かした、それぞれのまちづくりがある。文化も歴史も違う、観光資源も違う。それぞれの地域の特色を生かしたまちづくりをしてもらいながら、それを結んだ中津川市全体のまちづくり構想を作っていきたい。リニア駅が坂本にできるが、開業した暁には、市全体でそれぞれ地域の特色を生かした、訪れた皆さんに楽しんでもいただけるような特色あるエリアを作っていく。特に、やさか地区、福岡、付知、加子母地区は自然豊かな場所、中津川市も岐阜県も、リニアを見据えたまちづくりの中で、「森のまちづくり」と言っている。市の面積の8割が山でこれを生かし、都会との違い、今ある資源を生かしながら、人に来ていただく。癒しを得てもらう、休んでもらう、そういったまちを作る。中津川市に都市的なものを作っても何も魅力がない。中山道、歴史、自然を生かした、市独自のグランドデザインに皆さんのお知恵をお借りしたい。ぜひ坂下、やさか地区のいいところを生かしていきたい。今日はどうもありがとうございました。